＜コラム＞

エイムズ唯子の「心理学の周辺」

第 14 回：「ワイルドホースの如く」の巻

「今年の干支は馬（午）だなあ、12 年前はどこで何をしていたんだっけ」と記憶の糸をたぐっていたら、カナダ留学中に野生の馬の写真ばかりが入ったカレンダーを買ったことを思い出しました。クリスマスシーズンに売り出されるカレンダーは見ているだけで楽しく、珍しい鳥や花にはじまって、北米各地の灯台や憧れのリゾートビーチを集めたものなど目移りするのですが、その年はちょっと特別に、馬を見ながら考えたいことがありました。

ある授業の課題で書いたレポートが、冬休みに入る前にコメントとともに返されたのですが、思いがけないことが書かれていたのです。いわく「あなたのレポートは、まるで原野を疾走するワイルドホースの群れのようです。相当のエネルギーを感じますが、どこへ行こうとしているのかが分からないので、目が回りそうです」。

これはシマウマ…プーケット島のレストランにて

その授業では「物事を認識するとはどういうことか（認識論）」という哲学的な内容を取り扱っていました。ケリーという担当教授は家族社会学が専門で、「数字」ではなく「言葉」という象徴によって、知りたいと思う対象の本質に迫ろうとする質的な方法論を教えていました。これはグラウンデッド・セオリーとよばれ、聞き取り調査を中心とするのですが、アンケートや観察による量的な方法しか知らなかった私にとっては、とても斬新な世界でした。

野生の荒くれ馬に例えられてしまったレポートは、being（～であること）と becoming（～となること）の違いについて書こうとしたものでした。難解なテーマだとは思っていましたが、まさかそこまでむちゃくちゃなレポートになってしまっていたとは思っていませんでした。ケリーは、私の博士論文の指導にも関わっていましたから、「本番」ではあなたのなかの独りよがりなじゃじゃ馬をきっちりと飼いならさなければなければならないよと指摘されたのも同然で、これはずしんと胸に響きました。

その言葉を忘れるまいと、意地と覚悟で選んだカレンダーでしたが、いろいろな表情の野馬を眺めて暮らす 12 ヶ月は意外にも楽しいものでした。1 月の写真は、鞍も手綱もつけず、たてがみをなびかせて全力で走る美しい若馬たちでした。それを見ていると、ワイルドホースも悪くないぞと思えてきたのです。傍から見ていたのではわからないけれど、きっと馬たちは、馬たちなりの理由でどこかへ向かっているはずでした。

自分を走らせているものはなんなのか、よく考えてみなさいとケリーは言いたかったのでしょう。彼が最も重きをおいていたのは、対象について知ることと、それを知りたいと望む自分について知ることには、深いつながりがあるということでした。なにごとかを明らかにしようとするとき、自分の隠れた意図に気づいているかどうかで、対象を見る目が変わってくるというのがグラウンデッド・セオリーの神髄だからです。

ケリーの「言葉」は、点数や測定値といった「数字」にはないイメージの広がりを持ち、メッセージの受け手に対する多少の期待をこめて発せられていたように思います。ここ数年来、博士論文を本として出版しなければと思っているのですが、私の中で眠っているワイルドホースの生命力を呼び覚まして、今年は一気に突っ走ってしまいたい気分です。

（高崎健康福祉大学准教授、フォーラム共同研究者）